小特集「日露戦争と近代の記憶」

序

瀬崎圭二

明治三七（一九〇四）年二月一〇日、日本はロシアへ宣戦布告し、日露戦争は開始された。

今年二〇〇四年は、ちょうどその百年後にあたる。そのためであろう。今年に入ってこの戦争に関する様々な書物が刊行され、新聞、雑誌、テレビ等々でこの戦争をめぐる特集が組まれていた。その多くは、この戦争を〈われわれ〉の勝利の物語として、その勝因をある特定の人物の能力や〈われわれ〉の技術、あるいは相手国との差異の中に見出すことで意味付けていこうとしているようだ。

その百年という数字と、ここに小特集「日露戦争と近代の記憶」を企画したこととは、ほんのきっかけ程度の結びつきでしかない。と言うのも、百年というメモリアルな数字の先行のもとに、様々なメディアで流通し、消費されているこの戦争の物語を再びここで語ろうとすることよりも、この戦争、ひいてはこの戦争の勃発に至るまでの状況、あるいはこの戦争がもたらした状況を歴史的に相対化していくところにこの小特集の主眼があるからだ。それは、日本と呼ばれるこの国の近代のあり様について思考することでもあるだろうし、現在を取り巻く状況の生成過程を再認識することでもあるだろう。memorial とは memory の派生語であるようだが、日露戦争百年という「メモリアル」な数字は、まさしく memory＝記憶の問題として捉えられるべきなのである。

しかしながら、日露戦争という戦争を身体的な記憶として刻み込んでいるひとびとに巡り合うことは、もはや不可能なことであるだろう。それ故にこの記憶が身体から離れ、前述したような〈われわれ〉の物語として物質化し、それとして一旦意味付けられれば、その力を解きほぐし、それに抗うようなことばを紡ぎ出すことが益々困難になっていくであろうことは見え易い。が、これは困難なこと

として放置され続けていくのだろうか。

ヴァルター・ベンヤミンは歴史を次のように語っている。

歴史学の新たな弁証法的方法は、われわれが「かつてあったもの」と呼ぶ夢が実のところそれに関係しているような目覚めの世界としての現在を経験するための技法なのである。「かつてあったもの」を夢の想起において経験すること！――してみれば、想起と目覚めはきわめて密接な関係にある。つまり、目覚めこそは、追悼的想起の弁証法的経験であり、そのコペルニクス的転換なのである。（『パサージュ論』第三巻　今村仁司・三島憲一他訳　二〇〇三・八・一九　岩波現代文庫）

「かつてあったもの」を「目覚め」として「想起」すること、「想起」して「目覚め」ること、そこに「かつてあったもの」は現在の経験として目前に現象する。物語＝歴史として語られた出来事の固定性は、それがことばによって語られている限りにおいて、それに収斂しない記述の襞を招き寄せることになり、書かれた物語＝歴史は再び記憶として、それに触れた者の身に宿っていく。その記憶こそが、一面的な〈われわれ〉の物語＝歴史に取り込まれないようなことばを導き出すのではないだろうか。そのとき、日露戦争という戦争を契機として可能になった様々な現象は、過去という呪縛を解き放たれた出来事として、まさに今ここの問題ともなり得るのである。

そのような、〈われわれ〉の物語としてではない、日露戦争、あるいはそれがもたらした状況をめぐる記憶を手繰り寄せていくことは、前述したように、現在のこの身を取り巻く近代というシステムのあり様を知っていくことに他ならない。この小特集を構成する八本の論考は、日露戦争前後を契機として大きく転換していくこの国の近代を、文学を基軸に据え、様々なレベルで捉えようとする試みである。

冒頭の熊谷昭宏**「飛行と〈未来〉の日露戦争――東海散士『日露戦争羽川六郎』を中心に――」**が扱っているのは日露戦前の記述であり、東海散士『日露戦争羽川六郎』など、開戦前に多く刊行された日露戦争「未来記」を分析する。『日露戦争羽川六郎』が興味深いのは、そこに当時想像の産物でしかなかった飛行機が登場する点だが、そのような新兵器の登場に対する期待と、来るべき戦争の行方に対するこの「未来記」の欲望を炙り出す。

次に続く四本の論考が扱っているのはいずれも日露戦中の韻文の問題だ。**青木亮人「日露俳壇と「写生」――日露戦争前後の旧派、秋声会、日本派――」**は、日露戦中の俳句の状況を整理する中から、日本派の「写生」へのプロセスとして記述されることの多い明治俳

句史を再考する。**真銅正宏「乃木希典における文学――日露戦争および漢詩というジャンル――」**は、漢詩人でもあった陸軍大将乃木希典のテクストや、乃木をめぐる言説、ジャンルとしての漢詩が担ってきた役割をふまえ、そこから敷衍される〈文学性〉の問題を正面から論じている。この時期の「詩人」の表象そのものを問題としたのが**西川貴子「〈煩悶、格闘〉する「詩人」たち――日露戦争前後の「詩」及び「詩人」の考察――」**で、〈煩悶、格闘〉する詩人と、〈煩悶、格闘〉する国家、すなわち戦争とが結びついていく状況の中、それに収斂しない幸田露伴「出廬」の強度を抽出する。これらは結果的に詩と男性性の問題を浮上させることになるが、日露戦争下の女性の詩の問題をテクストのレベルから分析したのが、**笹尾佳代「銃後の守り――大塚楠緒子『進撃の歌』／『お百度詣』における「同情」の行方――」**だ。ここでは、大塚楠緒子が戦時中に発表した全く異質な二つの詩を分析対象に、それぞれが、戦時下で女性に求められていた「同情」や「慰藉」、それに伴った「涙」という表象の中で生成可能となったプロセスが明らかにされる。戦時下の女性には、出征兵士やその家族に対する「同情」や「慰藉」だけでなく、「倹約」もまた求められた。**瀬崎圭二「日露戦争と消費文化――百貨店（デパートメントストア）の承認――」**は、日露戦争前後の「倹約」という語の振幅の中で、富国の女性としての一定の消費が確保され、戦時中に誕生したデパートメントストアがひとびとに承認されていく論理を追う。

最後の二本の論考が扱っているのは日露戦後の問題である。**西村将洋「大連の詩人たち――詩誌『亞』と地政学――」**は、日露戦によって獲得された大連という場の記憶と、その場に集った詩人たちの動向を考察する。詩誌「亞」が語られる際に常につきまとう大連という場の問題は、この戦争を経過してこそその表象が可能になるのである。**岡本大作「「軍人神話」の行方――軍人の教材化に関する一考察――」**は、第二次大戦前の教科書を主な分析対象に、広瀬武夫や東郷平八郎に代表される軍人たちの神話の教材化と、その変容について整理している。東郷をめぐる歴史教科書の記述は、現在の日露戦争に対する記憶の問題でもあることは言うまでもない。

以上のように、この八つの論考は、日露戦前から戦中、戦後、そしてその記述の現在へと、一応は通時的な配列をとっているが、それらは単に線条的な時間軸を構成しているのではなく、互いに互いを参照しつつ、時に反射し、葛藤しながら、「日露戦争と近代の記憶」を織り上げている。そこには必然的にこの国の近代の姿が立ち現れてくることになるだろうが、それは果たしていかなる姿であるのだろうか。判断は識者に委ねたい。